

【表紙シリーズ】

房総の森ときのこ その 1

「マツ林のきのこ」

吹春 俊光

1. 平地のマツは元来不安定な二次林

マツという植物は元来、山の稜線上の岩がむき出しになったような場所に生える植物です。房総の平地ではシイ・カシなどが伐採されたあとに、数十年、マツ林（アカマツ、クロマツ）が見られることがあります。そのあとまた数十年たつと、次第に元のシイ・カシ林にもどります。房総の平地でみられるマツ林は、実は、長期的には存続できない不安定な二次林なのです。

しかし房総では江戸時代から普通の平地にマツがよく生えていました。江戸時代の浮世絵や、明治・大正頃の房総の風景絵葉書をみても、房総のほとんどがマツで被われていたことがわかります。花粉分析によると鎌倉時代の初期以前には、常緑広葉樹であるカシの仲間が卓越していたことがわかっています。しかし江戸時代になると急にマツがふえてきています。その後、昭和の前半までマツ林は長期的・安定的に見られる林でした。不安定なマツ林であるはずなのに、これはいったいどうしたことなのでしょう。

マツ科、ブナ科などの植物は根の部分で外生菌根というものをつくり菌類と共生しています。植物は光合成産物の何割かを菌類側に投資し、その見返りに菌類から窒素やリン等の栄養分や水を得ます（栄養共生）。陸上に植物が上陸した時に（4億年前）はじまった関係でした。当時は乾燥し過酷な環境であった陸の暮らしに適応するために、植物は菌類と共生したと考えられています。そして現在でもこの関係は続いてお

り陸上植物のほとんどは菌類と共生しています。植物は菌類なしでは生きていけません。

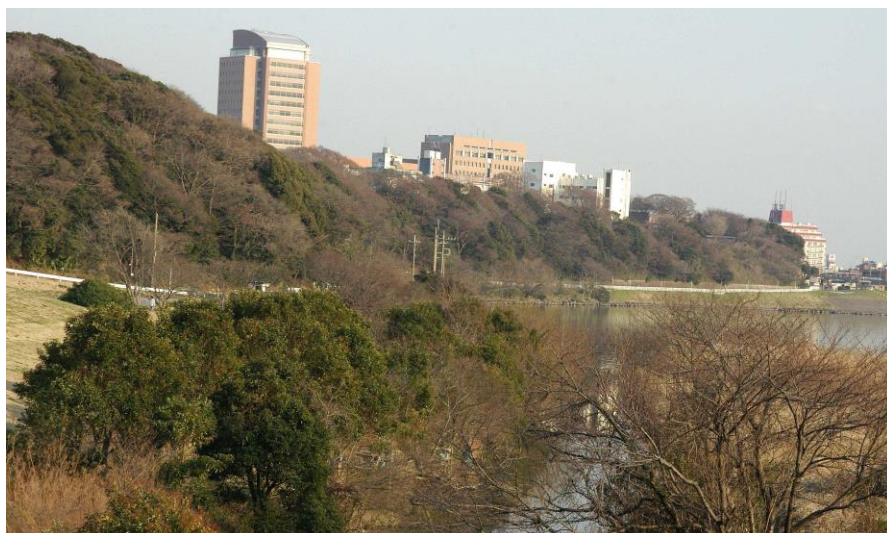
房総のマツの仲間は、ハツタケ、アミタケ、ショウロなどと外生菌根をつくり共生しています。マツの共生相手となるこれらのきのこ類の特徴として、有機物が降り積もった土壌は苦手、有機物が少ない貧栄養の環境が大好き、という性質があります。土壌中に有機物がふえてくると、他のきのこが増えてきて、貧栄養を好むハツタケ、アミタケなどは消えていってしまうのです。共生相手がいなくなるとマツもそのうちに弱ってしまい、消えいくことになります。

2. きのか相をコントロールすることでマツ林が成立した

ひとが里山などの周囲の環境から燃料や肥料を得ていた時代、人が暮らす周囲の里山では、常に落ち葉や枯れ枝が人の手によって回収され、常に貧栄養が保たれた環境でした。そこには貧栄養を好むきのこ類が沢山みられることになり、その貧栄養のきのこ類となかよしのマツが健康に元気に育つ環境だったのです。不安定な二次林であるマツ林も、人が有機物を常に除去することにより、安定的に数百年の長期間にわたり、維持管理されてきた、というわけです。すなわち人がきのこ相をコントロールすることにより、結果的に植生もコントロールしてきた、というのが里山を長期間安定的に維持管理する秘密であったのです。現在では、里山から燃料や肥料を得るといった暮らしが消滅してしまいました。手入れされなくなったマツ林は、



明治後期ごろの絵葉書より「(市川名所) 鴻之臺公園ヨリ古戦場鐘掛松ヲ望ム」



現在の国府台
(2005年3月16日
撮影)

図1 市川市国府台付近の植生の今昔、里見公園付近の植生の変遷

江戸川から眺めると、明治・大正時代の絵葉書には右手に立派なマツがみられ、左の奥の方までびっしりとマツが生えています（上図）。江戸時代に描かれたこの地の多くの浮世絵にもマツが描かれています。しかし手入れをされなくなった、すなわち「きのこ」によるコントロールを失ったマツ林は、次第に元の植生にもどり、現在では、房総の自然植生であるシイ・カシの常緑広葉樹林にもどってしまっています（下図）。

次第にシイ・カシ林にかわっていきます（図1）。その結果、身近にみられたマツ林がほとんどみられなくなり、マツ林の代表的なきのこであった、ハツタケ、アミタケ、ショウロというきのこもほとんど姿をみなくなっていました。ショウロは、千葉県指定の絶滅危惧種に指定されています。

3. 東のマツ、西のコナラ

同じ二次林に、コナラ林というものもあります。武蔵野のコナラやクヌギの雑木林は有名です。しかし房総はマツ林なのです。いったいなぜでしょう。明治初期の地図から植生を読み解いた地図があります（図2）。この図をみると、東京湾をはさんで西（武蔵野側）はコナラなどの雑木林、東

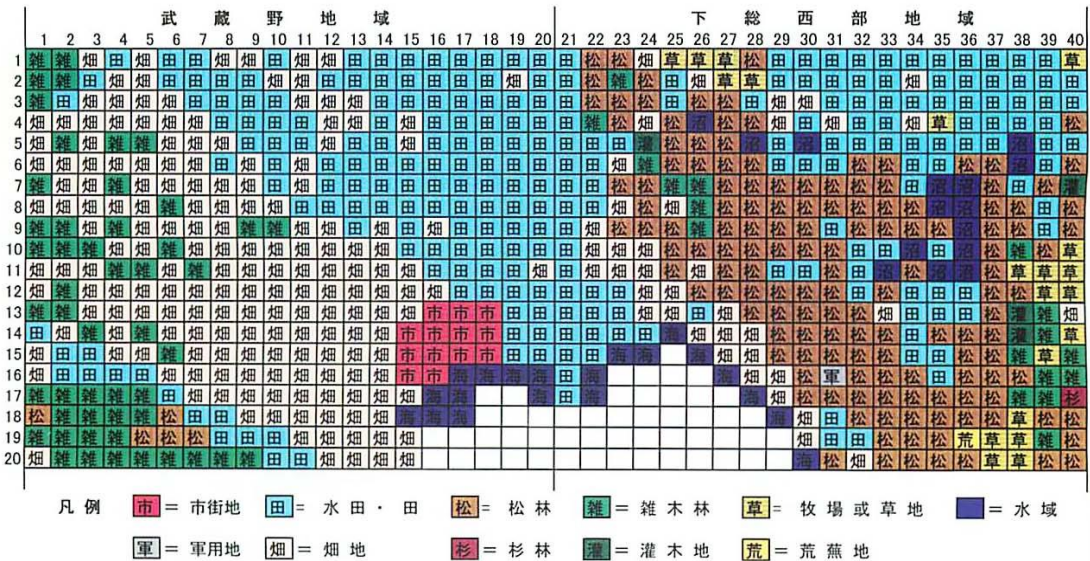


図2. 明治10年代の下総台地および武蔵野地とその周辺

各2Kmメッシュ内での土地利用を示したものの。下総台地は右手にあり（白黒印刷だとわかりづらいのですが）茶色く塗られ「松」と書かれたメッシュが多く、マツ林が優占していたことがわかります。※図は文献1

（房総側）はマツ林で被われています。同じ二次林ですが、西はコナラを大切に、東はマツを大切に残したということでしょう。つまり房総ではマツが積極的に好まれたのです。その理由として、炭焼きが盛んだった江戸時代、江戸にもっていく産物として火力のつよいマツ炭や薪を得るためマツが好まれたということが大きな理由の一つだったようです。漢方薬の原料として高く取引されたブクリョウ（マツの根に寄生する）も、マツ林の大切な産物だったようです。また金ケ作（現在の松戸市）の名主がハツタケを独り占めしようと山留めをおこない、怒った村人が奉行所に訴えた、という記録も残っているそうです（松戸市史中巻 近世編、444頁、1978）（文献2）。マツ林のきのこは昔から愛されていたのです。以上のような理由で、房総では人々はマツ林を好み、里山の樹としてマツを選択的に残し、また植えて（文献3）、大切に育ててきました。

4. 房総のひとの味覚を決定したマツ林という植生

現在、年配の方々は、マツ林でのきのこ狩りを、子供の頃の思い出としてお持ちの方も多い

ようです。それは里山林としてマツ林が広く見られた房総半島で、マツ林に囲まれ、マツに見られる食用きのこに馴染んできたためと思われる。それがハツタケ、アミタケ、シヨウロです。私は、房総のきのこを知るに従い、この3種を「房総のきのこ御三家」とよぶようになりました。ハツタケは他の県では、あまり重要視されない食用きのこですが、房総の人にとっては世界一の食用きのこです。それは、何百年にもわたり房総人を取りまいてきた環境が、その味覚も決定づけたということでしょうか。

- ・文献1. 白井豊（2002）明治10年代における下総台地西部の土地利用と薪炭生産 迅速測図と『偵察録』の分析を通して. 歴史地理学 44 (5): 1-21.
- ・文献2. 白井豊（2004）享保期の下総台地西部における林畑開発の意義. 地理誌叢 45(2): 80-94.
- ・文献3. 白井豊（2007）下総台地西部の牧とその周辺における薪炭林化. 歴史地理学 49(2): 1-21.

【マツ林のきのこ図鑑】 房総のきのこ御三家

●ハツタケ（ベニタケ科チチタケ属）

Lactarius lividatus Berk. & M. A. Curtis

傘の表面には環紋があり、傷ついた部分から緑青色に変色するため県内外で「ロクショウ」の名もあります。夏から秋にかけて樹齢の若いマツ林に発生します。つげ義春の「初茸狩り」という作品は、夷隅郡大多喜町の旅館で目撃した雨の情景が創作のヒントになっているようで、ハツタケと千葉県の因縁を感じさせるエピソードです。千葉県民ほどハツタケを愛するひとは他にいないでしょう。

ハツタケの学名は長いあいだ *Lactarius hatsudake* Nobuj. Tanaka とされてきましたが、近年の研究により、*Lactarius lividatus* Berk. & M. A. Curtis であることが判明しました。田中延次郎が命名（1890 年）する 30 年前に奄美大島産の標本をもとに名前がつけられていたのだそうです。

[文献] Neda, H. and Doi, Y. (1998) Notes on Agaricus in Kyushu District. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo 31: 89-95.



●アマタケ（ヌメリイグチ科ヌメリイグチ属）

Suillus bovinus (L.) Roussel

アマタケは加熱するとほんのり赤紫色となる点の特徴です。傘にぬめりがある点も、ナメコやハナイグチを愛する日本人の味覚に合っていて、味噌汁などの汁物として好まれてきました。房総半島では、五月初旬から十一月下旬まで、下草刈りされたような比較的手入れのよい若いクロマツ林やアカマツ林に発生します。



●ショウロ（ショウロ科ショウロ属）

Rhizopogon rubescens (Tul. & C. Tul.) Tul. & C. Tul.

ショウロはマツの仲間の外生菌根菌類で、手入れの行き届いたマツ林では豊富に発生します。房総の人はショウロを醤油で煮付けてご飯に混ぜて食べたりしてきました。江戸時代末期の菌譜や本草図譜という代表的な菌類図鑑類にも、リアルな写生図が掲載されていて、食用として身近に利用されてきたことがうかがえます。



従来、ショウロは腹菌類とよばれる仲間でしたが、近年の DNA 情報を基にした研究で、ショウロはイグチ類、特にアマタケに近縁であることがわかっています。アマタケはイグチ類なので、ショウロの胞子も緑色をおびた褐色に成熟します。ニセショウロは胞子が黒く成熟する点で、ショウロと区別することができます。